I　「学会 10 周年記念フォーラム」（第 11 回研究大会）報告

I The 10th Anniversary of JASA’s Founding Forum

「学会創立 10 周年記念フォーラム」のための弁明（アポロギア）

―今後の 10 年に向けて―

An Apologia for "The 10th Anniversary of JASA's Founding Forum": Aiming at Our Next 10 years' Action of Synthetic Anthropology

穴見　愼一

ANAMI, Shinichi

はじめに

総合人間学会（JASA: Japan Association of Synthetic Anthropology）では，2015 年度の「第 10 回大会記念フォーラム」に続き，2016 年度の第 11 回研究大会において「学会創立 10 周年記念フォーラム」を開催したが，前者がスムーズに準備・実行されたのに対し，後者の企画はかなりの難産であった。その理由の一つは，この 10 年間の試みにおいて，総合人間学における〈総合〉を真正面から問うことの難しさが関係者の間で身に沁みて理解されていたからである。「〈総合〉とは何か」を問うことは，本学会発足以来の焦眉の課題の一つであるが[(1)]，この種の問いは抽象的な議論に終始することが多く，確固たる議論軸が定まらない終わりの見えない空中戦が虚しく展開される可能性が極めて大きかった。それ故，これをテーマに掲げたフォーラムを開催することには二の足を踏む意見も少なくなかったのだ。しかしながら，学会創立 10 周年という記念すべき研究大会の好機にこそ，このテーマを取り上げたフォーラムを開催すべきである，という確固たる想いが筆者にはあった。それは，学会発足当時に掲げられた総合人間学の理想が，この 10 年間の試みでどの程度達成されたのかを振り返る必要を強く感じていたことに由来するものであったが，同時に，その成果を疑う心の声に従うものでもあった。そこで，本企画が決して抽象論に堕すことなく，「〈総合〉とは何か」を問い得る場となるために，本学会における具体的な「〈総合〉の方法論」を批判的に検証する作業を中心に据えたフォーラムを構想した。

この工夫は一定の成果を上げ，フォーラムの議論が抽象論に堕すことは無かったが，その一方では，フォーラムへの提題があまりにも具体的な「〈総合〉の方法論」に関するものであったため，「〈総合〉とは何か」への問いは原理論を離れ，単なる

「シンポジウムの改善論」に矮小化されてしまった，との感想を持たれた参加者も少なくなかったのではないかと思う。それ故，その原因がパネリスト各位の報告にあったのではなく，むしろその内容を全体の議論の中で生かし切れなかった司会者（筆者）の不手際にあったことを強調するとともに，フロアから提出された重要ないくつかの批判に応答する必要を司会者としては強く感じる次第である。

したがって，ここに，フォーラムにおいてなされたパネリスト集団の主張をその議論の背景も交えながら再構成することで，再度，誌面を通じて会員各位に訴え，それに対してなされたいくつかの主要な批判に真正面から応えたいと思う。その意味で，タイトルにつけた「弁明（アポロギア）」とは，かつて古代ギリシアのアテネで裁判に臨んだソクラテスがそうであったように，決して自らの弁護や言い訳をするためのものではなく，むしろ，パネリスト集団の報告内容に基づいてなされた本フォーラムへの提言の正当性を堂々と主張するためのものであることを付言しておきたい[(2)]。

1．何をしようとしたのか―「10 周年記念フォーラム」パネリスト集団誕生の背景

繰り返すが，本企画が最も留意した点は，「〈総合〉とは何か」を問う今回の試みが，百花繚乱の事態となることを避けることであった。それ故，もっとも重視したことの一つは，本学会のこれまでの 10 年間の試みを出発点として，議論を展開させることであった。その意味において，その原点というべきものは，「学会設立趣意」をおいてほかになかった。そこには，明確な規定を見出せないまでも，「〈総合〉とは何か」を理解するための糸口が示唆されていた。それが以下である。

「つまるところ，各分野での個別の研究を積み重ね，その中から人間認識に不可欠な知見をもらさず拾い出し，**それらを体系的に整序する作業をくりかえすこと**で，全体像に接近するしかないであろう。

このためにまず，必要な諸課題を整序し，それらについて具体的な研究プログラムを作り，各方面から討議を行っていくことが，当面の仕事となろう。それにはまた，諸科学の分野から参加された人々の自由かつ闊達な討論の場を造らなければならない（小林 2006：4)。」（強調と傍点は筆者によるもの）

しかし，一旦，独自の枠組みで分離した人間に関する個別知を如何にして「体系的に整序する」ことができるというのか。それこそが，本学会の主要な課題の一つであり，同時に，この 10 年間，あまり意識されてこなかったことなのではないか。それでは，〈総合〉などできないのではないか。そして，この問題の重要性を広く会員に訴えることこそ，今回の企画が目指したものであった。無論，ただ警鐘を鳴らすだけではない。むしろ，どうすべきか，具体的な提案を会員ののど元に突きつけることこそが，そして，そこから様々な議論を喚起することが本企画の本丸なのである。そのためには，考え抜かれた方法論を提示する必要があった。今回の場合，その基盤となるのが，上柿氏の「中間理論」であり，それ故，本フォーラムの試みは，この理論から出発することにした。ただし，上柿氏は，必ずしも設立趣意の文言に意識的であったわけではない。しかし，それでもなお，両者が違和感なく接続するところに，「〈総合〉とは何か」という問いの共有がなされているのだ，と筆者は考える。

上柿氏の議論のポイントの一つは，いわば，「総合の〈二段階論〉」とでも表現されるものであり，学会のこれまでの試みの様に，具体的なテーマ設定に基づいた各分野からのダイレクトな〈総合〉（以後「直接的総合」と呼ぶ。）を目指すのではなく，各分野の視線が交差する契機として特定の議論（「中間理論」）を論者間で共有し，それを経由させた議論どうしを連関させる仕方での間接的な〈総合〉（以後「間接的総合」と呼ぶ。）を目指すべきである，とするものである。したがって，〈総合〉の第一段階としては，この「中間理論」を準備し，論者間で共有するプロセスが必須となる。ここで重要なのは，この「共有する」ということが，単に「中間理論」を理解するということには止まらず，論者自身がその独自展開を図り，各々の専門との結合を成し遂げることを意味する点である。そして，それを踏まえた第二段階で，「中間理論」を介した具体的テーマの最終総合が達成されるのである。

こうした主張は，これまで曖昧なまま放置されてきた〈総合〉のイメージを大きく揺さぶるものであり，〈総合〉とは何かを問う新たな契機として学会でも高く評価されている。上柿氏によれば，その「中間理論」たる議論の一つこそが〈自己家畜化〉論であり，それ故，例えば，「〈自己家畜化〉研究会」の試みこそが〈総合〉の第一段階にあたるものとされる。〈自己家畜化〉論が総合の「中間理論」たる理由は，この議論が「人間」を捉えるための一つの「総合的な枠組み」であり，この枠組み自体が多様な学問（研究）で応用可能な点に求められる。中でも，小原氏の「人間（ヒト）」概念は，人間は生物種としての「ヒト」を内に含む形で社会的に実存するという意味で，「総合的人間学」に相応しい表現である，と評価される。さらに，上柿氏は自らが専門とする哲学・社会理論の分野における〈自己家畜化〉論の応用の具体例として，人間・社会・自然の三項関係に着目した「総合人間学的文明論」と「総合人間学的本性論」の展開の可能性を示し，他にも他分野における活用の可能性に言及されている(3)。

重要なのは，既に指摘された通り，多様な領域が同じ「中間理論」を共有しながら，「人間」を新たに捉え直す試みを実践することなのである。ただし，長期的な展望に基づく総合人間学の展開においては，複数の「中間理論」が必要であり，今後は，さまざまな機会を捉えて，「〈自己家畜化〉研究会」と同様の試みがいくつもなされる必要がある，とのことであった。しかし，研究会活動の内実を知る筆者にとって(4)，それは，〈総合〉の困難さを改めて認識させる意味において不安の残るものであった。なぜならば，〈自己家畜化〉論は動物学者小原秀雄が 40 年という学者人生をかけて構築してきた議論であり，そのエッセンスの吸収と独自の議論展開にも各々の論者でそれなりの時間が費やされてきたからだ。

すなわち，そもそも「中間理論」足り得る既成の議論は稀有であり，仮にそれを構築しようとすれば，そこには既に〈総合〉の要素が含まれるものと理解される。それが論者間で共有され，しかもそれが複数行われることは極めて困難だと思われ，上柿氏の主張する〈総合〉の第一段階の克服こそが〈総合〉の問題の本丸であることが分かる。極端な見方をすれば，上柿氏の議論（「間接的総合」）は，これまでの「直接的総合」が孕んでいた問題点を〈総合〉の最終的な段階から摘出し，それとは別の〈総合〉の第一段階に移植し直しただけなのかもしれない。しかし，それでも上柿氏の試みに筆者が魅了される

のは，その主張のエッセンスが，これまでの「直接的総合」の試みの中にも無意識な仕方ではあったが確かに存在していたからである。そうした試みの典型の一つが第 7 回研究大会（長谷場実行委員長）におけるシンポジウムであった。それはまさに，〈自己家畜化〉論をベースにして構想されたシンポジウムであったが（ただし，種々の訂正が施され，原案通りには実施できなかった。），より重要なのは，シンポジストへの事前連絡を通して，論者間でのキーワードの共有を試みた点である。

すなわち，シンポジウムのテーマに関するいくつかのキーワードを事前に提示し，それらを共有することで，各々の議論が自ずと交差する契機を意図的に生み出そうとしたのである。しかし，この試みは上手くは行かなかった。シンポジストは誰もキーワードを意識して用いなかったからである。連絡によるお願いだけでは，議論におけるキーワードの共有でさえ困難なのだ。そこに欠けていたのは，上柿氏が指摘した〈総合〉の第一段階（特に，「共有」）に相当するプロセスだったのである。そして逆に，この事実が論者間で何か（「中間理論」やキーワード等）を共有することの難しさを示唆しているようにも思う。

それ故，その意味で大変興味深いのが，大倉氏によって 3 年前から開始された若手シンポジウムの試みであった。それは，論者同士が数回にわたる共同の勉強会を通じて，テーマの具体化のみならず，相互の議論を共有するプロセスを経て行われるシンポジウムの実践例（議論のボトムアップ型共有）である。パネリスト自身がシンポジウムのテーマ設定の段階から議論に加わっていることは，少なくともテーマの共通理解やその理解の仕方の差異に関する相互の確認が事前になされ，異分野の論者によるシンポジウム実践において大変有意義である。しかも，三年間のシンポジウムのテーマを関連付け，一，二年目での成果をもとに三年目のシンポを行う仕方での〈総合〉実践を試みたことも，その可能性の追求として大変意義深いものである。

無論，若手シンポは，上柿氏が指摘した意味での「中間理論」を事前に共有しているわけではない。しかし，パネリスト自身がテーマ設定の議論に加わり，相互の持論を批判しあうなかで，議論の前提として共有すべき概念や「議論の枠組みのようなもの」を作り上げていくのだと思う。大倉氏はそれを「問い」という言葉で表現した。それは，長谷場氏が指摘されたような「キーワード」とも，上柿氏が主張される「中間理論」とも異なり，ちょうど両者の間に位置付けられるようなものだと考えられる。おそらく，「キーワード」の共有のみでは議論の拡散の歯止めにはならず，議論の収斂のためには少なくともその方向付けが要請されるのであり，その意味で，共通の問題意識の上に示された議論の方向性を示す「問い」の共有が必要とされるのである。

こうして，シンポジウム実践における「〈総合〉とは何か」を問う，一つの議論軸が形成された。それが，「キーワード（長谷場氏）――問い（大倉氏）――中間理論（上柿氏）」である。そして，それらを共有することが，学会設立趣意に謳われた「人間の認識に不可欠な知見」を「体系的に整序する」という総合人間学の方法論構築への確かな一歩であることを主張するべく，本企画のパネリスト集団は「10 周年記念フォーラム」に臨んだのである。

2.「学会創立 10 周年記念フォーラム」の概要

フォーラムの冒頭，司会者である筆者は，次の様に口火を切った。

「趣意文（「予稿集」8 頁参照）にも示したように，本企画は『この 10 年の試みから総合人間学における〈総合〉を問う』ものであり，参加者が総合についての議論を思い思いに披露しあう場ではない。その意味で，本企画の鍵は『これまでに何ができたのか』という『この 10 年の試み』の振り返りにあり，それを批判的に検証しつつも，その成果をこれからの活動に活かそうとする議論の姿勢にある。おそらく，本企画が目指す『これから何をすべきか』についての知見はそこからしか得られない。ただし，限られた学会活動の中で，理論上の知見がそのまますべて実践可能なわけではない。その意味で，私たちに『何ができるのか』という視点も忘れてはならない（穴見 2016：1)。」

これに続き，3 名のパネリストが各自の報告を展開するのだが，紙幅の制限もあるので，詳細は，各パネリスト自身が執筆する報告論文に任せようと思う。ここでは，筆者が司会者として行った「論点整理」とそれに基づくフォーラムへの「提題」を中心にして，前節（1）を補足する仕方で，フォーラムの概要を述べることにする。

まず，基調報告として行われた上柿氏による「中間理論」の提案は，「これまでの総合」（直接的総合）を振り返り，「新たな総合」（間接的総合）を目指す契機を与える点で，大変意義深いものであった。それは，「総合」実践における前提として異分野の論者間における特定の概念や議論の枠組みの共有の必要を強調し，それを介した個々の議論の展開が自ずと相互の連関を生むことで，「総合」を準備することが期待されるとした。そのような視点からこの 10 年を振り返ってみた時，「これまでの総合」の実践の中にも，それに類似したものがあったことに気付く。その一つが，「キーワード」（概念）の事前共有を画策した第 7 回のシンポジウムであった。ただ，そこで問題になるのは，何が「総合」を準備する概念か，その見極めであった。

これに関し，長谷場氏は，ご自身のシンポジウム司会者としての経験を振り返り，その失敗の原因とそれに代わる解決策を報告された。それによると，本来であれば，〈自己家畜化〉やその概念理解の核となる〈人間（ヒト)〉等のタームの使用をパネリスト全員にお願いしたかったのであるが，それは難しいと判断されたため，「人間」や「ヒト」等の一般的用語の使用を，メールを介してのみお願いしたことが失敗の要因ではないか，とのことであった。そこには，二つの含意がある。一つは，メールでの依頼だけでは話が通じない，ということ。もう一つは，仮に，パネリストが「人間」や「ヒト」の語を意識的に使用したとしても，それは〈人間（ヒト)〉の概念には遠く及ばず，ましてや，〈自己家畜化〉論には結びつかないということである。

そこで，長谷場氏は，〈自己家畜化〉論に代わる，しかも，その本質を無意識のうちに表象し得る，さらには，一般的に用いられる用語として「自律」を導出された。その思考プロセスの基盤となったのは，幼児教育で名高い近藤薫樹氏の議論（「さて人間とはなにものか」，日本福祉大学生活協同組合，1988 年）であった。近藤氏もまた，〈自己家畜化〉論に関心を抱かれ，それに独自の解釈を与えた学者の一人であったのだ。ただ，煩雑さを回避するため，その詳細な説明は避け，その代わりに，この「自律」

という語が，いかに〈自己家畜化〉論に代わる概念として有用であるかを，第 7 回シンポジウムの 4 人のパネリストの報告に具体的に当てはめて示された。しかし，この説明の手法が，後の質疑における強烈な批判（「総合と分析」を巡る議論）を招くことになるが，それはまた，節を改めて取り上げることにする（第 4 節参照）。

長谷場氏の報告はこれに尽きない。シンポジウムに先立つパネリスト間での「キーワード」の共有さえ難しいことを知る経験から，むしろ，今回の試みの様に，シンポジウム後にその成果を踏まえて，個別知の〈総合〉を行うことの可能性を提案されたのである。実際，長谷場氏は，「自律」というタームに着目することで，自らが司会を務めた第 7 回シンポジウムだけでなく，第 8 回シンポジウムの成果をも包含するより体系的な個別知の整序が可能であることを指摘された。これは，シンポジウムの成果が一年単位でしか認められなかったこれまでの〈総合〉実践のあり方を大きく変えるものであり，本学会のこれまでの 10 年の試みを体系的に整序して，人間の全体像へと近づく，「〈総合〉の高次化」ための確実な一歩と成り得る方法論だと考えられる。

また，その意味で重要なのが，最後に報告された大倉氏による若手シンポの取り組みに基づく議論である。大倉氏は，「キーワード」の共有のみでは不充分であるとし，自らが「問い」と呼ぶ議論の共有の必要を指摘された。これに関し，大変興味深かったのは，大倉氏がこれまでの若手シンポのやり方に限界を感じておられたことである。それが，「パネリスト集団 VS フロア」問題である。大倉氏によれば，確かに，若手シンポでの論者間の議論の共有は十分に可能であったし，それがシンポジウムの事前準備の中心的課題の一つであるともされる。しかしながら，それはあくまでパネリスト集団内での議論の共有の話であって，より重要なのは，シンポジウム本番におけるフロアとの議論の共有である，とされたのだ。それは，パネリスト集団での議論の共有ができているからこそ，逆に，問題認識に関するフロアとの温度差が強く感じられる現象なのかもしれない。実際，若手シンポでは，フロアとの質疑・応答が開始された後に，思うようには議論が深まらず，そこに新たな仕方での議論の共有の必要性が感じられたのであろう。

大倉氏の報告によるもう一つの主要な貢献は，個別知の体系的整序を行うにあたって，シンポジウムの当事者や関係者による基準（「キーワード」や「中間理論」）だけでは，時代的な制約を受け易く，ややもすると恣意的なものに陥る危険があるので，学問史を振り返ることで，知の体系化を試みてきた古典に学ぶ必要があることを指摘されたことである。この指摘は，とかく現実の具体的な問題と格闘することを志向する総合人間学の試みにとって，時代の枠に囚われないという意味で，外部の視点という一つの客観性を獲得する契機を準備することの重要性を言い当てている。

以上のように議論を整理したとき，三者三様でありながらも，そこには「総合」に関する暗黙の共通イメージがあることに気付く。その一つは，「議論の共有が総合の前提である」というものであり，それができれば，「総合が実現される」とするものである。しかしながら，テーマや問題意識などの共有は，そもそもシンポジウムという議論の形式の前提であり，その意味で「議論の共有」自体は〈総合〉に特殊なものではない。したがって，「どのような

議論を共有するのか」が問題の争点であり，この視点から，「キーワード」「問い」「中間理論」を共有する効果とはどのようなものか，改めて吟味する必要があるだろう。

その場合，やはり，〈総合〉をどのように理解しているのかは重要である。それは，本学会の「設立趣意」に従えば，①諸科学からの「人間認識に不可欠な知見」の抽出，②それらの体系的整序による人間の全体像の再生とその統一的把握，として理解される。しかしながら，本学会におけるこれまでの実践には，決定的に欠けている点があった。それが上記の②であり，司会者は，上柿氏の「中間理論」はそこにも接続される可能性を含んでいると理解している。すなわち，各大会におけるシンポジウムの実践そのもののみならず，長谷場氏からの指摘と同様に，むしろシンポジウム後にそこから抽出される複数の「人間認識に不可欠な知見」を関連付けて整理する作業にこそ，「中間理論」が必要とされているのではないか，という理解である。（この場合，上柿氏の議論は，既存の総合実践に代わる新しい方法論としてではなく，むしろそれを補うものとして理解される。）

このように考えた場合，「中間理論」の活用の方向性は少なくとも二つある。一つは，上柿氏が主張されるように，既存の総合実践（A）に代わる新たな方法論（B）としての可能性追究の方向。そして，もう一つは，司会者が提案する，既存の方法（A）を補完・強化した方法論（A’）構築の方向。これらの実践において懸念されるのは，前者（A→B）の試みでは，残された課題（「中間理論」の形成と共有，特に，外部パネリストとの共有問題など）も多く，その克服には時間を要すため，中・長期的な観点にたって，実践に向けた準備を進めて行かねばならないことである。後者（A→A’）の試みもまた，「中間理論」に依存し，その形成と共有には時間を要す以上，今からすぐに実践できるというわけではない。ならば，どうするのか。

そこで，当面は，一方で「中間理論」の形成と共有を図りつつ，他方では，「中間理論」に代わるものとして「キーワード」（テーマと結びつく，より抽象性の高い概念）を提示して，〈総合〉を実践していくしかないだろう。長谷場氏によれば，例えば，第 7 回大会のシンポジウムでは，それは「自律」として改めて提示された。ただし，それは特殊ではないにしても十分に共有された概念とは言えないので，一定の成果を上げようと思えば，何かもう一つ別の工夫を施す必要があるだろう。例えば，大倉氏の議論は，それを「問いの共有」で補完する可能性を示唆している。

また，一日限りのシンポジウムの成果のみにこだわらなければ，例えば，長谷場氏ご自身が既存の総合実践（「一次総合」）の成果（「人間認識に不可欠な知見」）をもとに，「自律」を核概念とした新たな総合（「二次総合」）を行い，その成果を電子ジャーナルに論文として掲載し，誌面を通じて議論を喚起することで，会員間にその共有を図ることも「〈総合〉の方法論」の一つとして位置づけられる必要があるだろう。

その意味では，シンポジウムのみを〈総合〉実践の場として捉えるのではなく，学会の他の諸活動と連携した仕方で，二重，三重の構えを持つ〈総合〉実践の機会を創出すべきである。また，そうでなければ，各シンポジウムを架橋する高次の〈総合〉実践の場（「〈総合〉の高次化」）は成立せず，したが

って，せっかく抽出された「人間認識に不可欠な知見」はバラバラのままとなり，われわれはいつまでたっても人間の全体像に迫ることができないだろう。

そこで，パネリスト集団は以下の提言を行い，本学会のこれからの 10 年が，まさに今，ここから始まってゆくことを宣言した。

提言「次の 10 年になすべきこと」

	シンポジウムの改善点	それ以外の改善点（シンポとの連携強化）
直近	①「キーワード」の共有の試み ②「問い」の共有の試み ③経年シンポによる段階的総合の試み	①NL や EJ の活用（シンポ総括論文掲載） ②研究会の活用（反省会や準備会合として） （※二次総合，三次総合の実践）
中長期	①「中間理論」の共有 ②「間接的総合」の実践	①「中間理論」の形成（個別研究会の育成） ②「人間認識に不可欠な知見」の体系的整序

〔注〕表中の「NL」は年 2 回刊行のニュースレターを，「EJ」は電子ジャーナルを指す。

3．〈中間理論〉批判への応答

以上の様な趣旨に基づくフォーラムへの提題に対して，少なくない批判が噴出した。その中でも，もっとも強力で，根本的な批判の一つは，〈総合〉の定式化を模索する今回の試みが，そもそも的外れである，とするものであった。なぜならば，〈総合〉とは，現実の具体的な問題と格闘するための方法論であって，その解決の糸口を探るための個別知の結集を意味するのであり，それ以上でも，それ以下でもないからである。すなわち，〈総合〉の方法の理論化を目指す今回の試みは，研究活動の手段であるはずの〈総合〉をその目的とする錯誤を犯してしまっている，と指摘されたのだ。それは，机上で展開される学問のための学問でしかなく，本学会創設の趣意にそぐわない，との指摘でもあった。

この思わぬ方向からの批判に，司会を務めていた筆者は少したじろいだが，上柿氏は冷静だった。なぜならば，そもそも〈中間理論〉はシンポジウムの方法論のみに還元される議論として構想されたものではなく，学問が個別領域を越えて現実の具体的な問題と格闘することが如何にして可能かを論じる，〈総合〉の原理論を目指すものであったからだ。すなわち，それは，本学会創設の趣意が実現されるための根本条件を探るためのものであり，もとより，シンポジウムの方法の定式化を目論むものではなかったからである。それ故，本企画の試みが「学問のための学問」でしかないとの批判は一面的なものに過ぎず，「現実の具体的な問題と格闘する学問」が如何にして可能かを論じる背景を持つものである点を見逃してしまっているのである。そして，この視点に立てば，本学会においても「学問のための学問」は必要とされるのである。

こうした誤解に基づく批判が生じる原因の一つは，明らかに，本企画の原型を構想した筆者にある。そして，こうした批判が投げかけられる可能性があることは，実は，フォーラム直前の準備会合でも指摘されていたことであった。それは，まさに，本企画における〈中間理論〉の活用の仕方が，シンポジウ

ムの方法論の模索に特化しすぎており，〈中間理論〉の持つ議論の射程を矮小化してしまっている，とする上柿氏からの懸念であった。それは，そもそも〈中間理論〉とは〈総合〉の原理論であり，今回提起されるシンポジウムの方法論の模索はその応用の一つにすぎないのに，恰も，それが〈中間理論〉の全てであるように受け取られかねない，というものである。しかもその時点で，筆者を初め，パネリスト集団全員がその懸念を共有できていた。

しかしそれでも，本企画の構想の原型を変更しなかったのは，「〈総合〉とは何か」を問う試みが，決して抽象論に堕すことなく，また，これを廻る議論が百花繚乱の状態に陥ることを何としても回避したかったからであり，また，そうすることが，本企画成立のための根本条件であるとの理解が，パネリスト集団には共有されていたからである。ただ，ある程度予想していた批判であったにもかかわらず，その実際の場面では，批判者の迫力に押され，筆者はその指摘を一旦は認めざるを得なかったのである。それは司会者としては明らかに失態であったが，筆者の心のどこかに，その批判を受け入れたい，という積極的な想いがあったのは事実である。なぜならば，この手の議論は，本学会の研究活動のあり方を廻って，これまでも繰り返されてきたからである。

その一つが，「安保法制法案」批判の学会声明の提出を廻ってかわされた議論である。それは，そもそも学会とはどの様な場所か，学問はどのようにあるべきか，という一般論も惹起しながら，それでも，総合人間学会とはどの様な場所か，総合人間学はどうあるべきか，という本質論に収斂する議論の展開を見せた。結局，その結論の一致を見ることはなかったが，たとえそれが政治色の濃いものであっても，現実の具体的な問題に積極的にコミットすることこそが総合人間学の特色であり，総合人間学会の使命であることが意見の大多数を占めるものとなった。そこに，筆者は，会員各位の単なる〈総合〉の概念理解を越えた，想いや願いの様なものがあることを認めざるを得ないのである。

しかしながら，だからと言って，「〈総合〉とは何か」が不問に付されてよいわけはない。むしろ，〈総合〉がそうしたイデオロギー的性格を帯びるものであるとするなら，なおさら機会あるごとに，「〈総合〉とは何か」を学問的に問い直すことが必要とされるのである。それが，学会というアソシエーションのミニマムであり，学問の持つ真価というべきものではないか。そして，上柿氏による「中間理論」の試みは，その文脈で理解されるべきものなのである。

4．「〈総合〉のための〈分析〉」という視点の必要

パネリスト集団の提題に対するもう一つの痛烈な批判は，長谷場氏が試みられたシンポジウムでの論者間に共有されるべき「キーワード」抽出のプロセスが，〈総合〉ではなく，〈分析〉ではないか，とする指摘である。それは，すなわち，そもそもパネリスト集団の提案は，〈総合〉の方法論の名に値しない，という含意のある批判なのである。仮に，その指摘が妥当なものであるなら，確かにそれは今回の試みにとって致命的なものとなるであろう。しかし，この指摘は誤解に基づく的外れなものである，と筆者は考える。ただし，その誤解の原因を作ったのは長谷場氏ご本人（説明の仕方の問題）であることも指摘しておく必要があるだろう。

既に少し触れたが，長谷場氏の議論のポイントは，

シンポジウムの当日に初めて顔を合わせる場合も少なくない，しかも専門分野を異にするパネリストに，どのようにして「キーワード」を共有して頂き，それに基づいた報告が実現できるのか，に置かれていた。第 7 回大会のシンポジウムの場合，本来共有されるべきキーワードは「〈自己家畜化〉論」であった。しかし，それをパネリスト全員に共有して頂くことは不可能である。そこで，長谷場氏は〈自己家畜化〉に代わるキーワードとして「自律」という語の使用を提案されたのである。なぜならば，「自律」とは「〈自己家畜化〉論」理解の核心に位置付けられる概念であり，同時に，様々な学問分野でタームとして使用され，かつ，日常語としても通用している点で，現実の具体的問題に対する個別知の〈総合〉の為のメルクマールとしての条件を満たしている，と考えられるからである。

筆者は，この長谷場氏の提案に賛同するが，論者によっては，そのような「キーワード」活用術こそ，議論の混乱を招くものではないか，と考えられるかもしれない。なぜならば，長谷場氏の見立てに従えば，「自律」に対する理解の幅が広すぎて，議論は収斂しにくい，と考えられるからである。そして，確かにその通りなのである。しかし，長谷場氏はパネリスト間の議論だけで，個別知の〈総合〉が達成できるとは考えていない。むしろ，そうした議論を外から眺められる立場にある司会者やフロアにいる参加者自身がそれぞれ独自の〈総合〉を実践する際のまさに目印としてキーワードを活用するのである。その意味で，それは，むしろ幅の広いものであるほうがよいのである。そして，それもまた，〈総合〉の方法論の一面を言い当てている，と筆者は考えている。それ故，問題はそこにはない。

実は，司会を務めていた筆者も驚いたのだが，「自律」というキーワードの抽出プロセスに関する長谷場氏の説明は，事前の打ち合わせの段階と，当日の報告では大きく異なっていた(5)。前者では，既に述べたように，「〈自己家畜化〉論」理解の核心にある概念として「自律」というキーワードを抽出できる，という説明であった。これは，「〈自己家畜化〉論」理解に少々覚えのある筆者にとって，納得できる説明である。ところが，後者では，長谷場氏はそのように説明されず，第 7 回シンポジウムでの議論を振り返って考えた結果，「自律」というキーワードの有効性を見出した，と報告されたのである。それは，シンポジウムのために事前に共有されるべきキーワードの選出が，シンポジウムの結果をもとに実践されるという，本末転倒の感を余儀ないものにする説明の仕方だったのである。

それはすなわち，本来は「〈総合〉の為の〈分析〉」の結果であったものが，説明上の不手際により，「〈分析〉の為の〈分析〉」の結果に堕した瞬間であったのだ。そして批判者は，それを見逃さなかったのである。それが，「〈総合〉ではなく，〈分析〉ではないか」との指摘の背景にあった事情であろう。その意味で，批判者の指摘は正しく，しかしそれは，誤解に基づくものなのである。しかしながら，これは怪我の巧妙とも言える事態であり，この議論から，改めて，総合人間学における〈総合〉と〈分析〉との関係を整理することができる。

その関係性の理解の鍵は，〈総合〉の二つの対義語の存在にある。その一つは，これまで論じてきた〈分析〉の概念であるが，もう一つが，〈個別〉である。そして，この〈個別〉こそ，総合人間学の〈総合〉に対する真の対義語であり，〈分析〉はむ

しろ，〈総合〉とは補完関係にある重要な思考プロセスなのである。そのことは，古代ギリシアの哲学者プラトンが記した『パイドロス』でも論じられており[6]，紀元前の昔から一つの説であることが分かる。すなわち，〈総合〉は〈分析〉を擁し，〈分析〉もまた〈総合〉を擁するのであり，その繰り返しこそが総合人間学を可能にする，ということである。

おそらく，批判者もこの見解には賛同なされるであろう。そして，仮に，筆者の弁明（アポロギア）が正当なものであるなら，長谷場氏にも，誤解の生じる可能性を低減させて頂くべく，その説明の手法を改めてもらう必要があるように思う。そして，その上で改めて，批判者に対し，その指摘の意味を確認してみたいと思う。なぜならば，なされた批判には，筆者が想像する以上のものが込められていることも想定されるからである。

5．総合人間学における学問の形

パネリスト集団の提題に対する直接の批判ではないにも関わらず，筆者の脳裏にとりついて離れない指摘の一つに，「報告内容を決して批判しないようにする。」というものがあった。無論，ここでの「批判」とは，むしろ「否定」の意味として理解した方がよいだろう。すなわち，それは，「総合」の方法論的態度として「批判しても，否定せず」の精神が徹底されるべきである，との指摘だと考えられる。これは，異分野間の知の総合を試みる上では，極めて重要なことだと思う。なぜならば，既存のアカデミズムの壁によって隔てられた知と知を結び合わせることは，少なくともその壁を超え出ようとする努力なしには達成し得ない，と思われるからである。「越境への努力」，そして「そのための批判」が必要なのである。しかし，「否定」は，それらが準備するすべての好機を逃してしまうと考えられるのだ。

その意味で，それは，誰かの報告内容の中に，「共有できるものを何か一つでも見出そうとする努力」，とも言い換えられる方法論的態度であり，同時にそれは，人間理解（人間学）には決して欠くことのできない学問的要素なのではないだろうか。おそらく，そこでより重要になるのは，報告内容そのものではなく，むしろ，「何故，その人はそのようなことを言うのか」，という報告者の問題意識の理解であろう。それは，場合によっては，その問題意識の背景をなす，報告者の「心情」をも理解する，ことを意味している。それを，「もはやそれは学問ではない。」と糾弾する声があがるかもしれない。しかし，本当にそうだろうか。逆に，そのような理解が無ければ，自らの枠を超え出る契機など，どこにも見つけられず，結局は自らの学問に自閉する帰結に終わるのではないか。

「あなたのやっていることは，学問ではない。」他の学会でも発せられることが珍しくはないこのセリフは，本学会とも無縁ではない。しかしながら，このセリフの持つ意義は，他の学会と本学会では同じではない，と考える。理由は二つある。一つは，これまで述べてきたように，個別知の探求を目指す他の学会とその総合を目指す本学会とでは，知の探求に対する方法論はおのずと異なるからである。すなわち，既存のアカデミズムの個別分野の枠の中での議論が必須の前提である他の学会と知の探求の為には個別分野の枠を乗り超えて行かざるを得ない，むしろそこからはみ出した部分で勝負しようとする本学会の学問に対するスタンスが，同じであって良

いはずがない，と考えられるからである。それ故，本学会での「あなたのやっていることは，学問ではない。」というセリフは虚しく響くだけであり，あらゆる「越境への努力」と「そのための批判」がもたらしてくれる知の探求への好機を逃してしまうだけなのである。

この捨て台詞を批判するもう一つの理由は，本学会が市民参加を積極的に呼び掛けていることに由来するものである。一般に，学会とは，大学院等で研究の訓練を受けた専門家にしか開かれていない組織であり，その意味で，市民が一般会員として所属することはあり得ない。しかし，本学会は，広く市民参加を呼び掛けることに意義を見出し，それに応える仕方で，実際に，研究に関する特別な訓練を受けていない，その意味での一般市民の方々が会員として参加しておられる。その方々に対し，「あなたのやっていることは，学問ではない。」と発しても，筆者には，意味のないことのように思えてならない。それならばむしろ，どうすれば学問になるのかを具体的に指摘して，「共有できるものを何か一つでも見出そうとする努力」を成すべきなのではないだろうか。筆者は，たとえそれが，報告者の「心情」であっても，総合人間学の重要な要素ではないか，と強く訴えたいのだ。

無論，だからと言って，「何でもあり」「何でもござれ」の学会にしてよいとは，筆者も全く思わないし，研究の専門家ではない市民会員も，本学会の特殊事情に甘えていてはならないように思う。また，そうあるべきだし，そうであるならば，総合人間学における「学問の形」を改めて問い，模索して行く必要があるのではないかと思う。そして，このような疑念を抱くとき，「総合」を問うことだけでは見えてこない「総合人間学」の問題，すなわち，「人間学」を問うことなしには見えてこない「総合人間学」の課題が否応なく生起してくるのを感じる。それ故，今回の試みは，先の第 11 回研究大会のみで閉じるべきものではなく，むしろ「学会創立 10 周年記念フォーラム」の反省から再出発し，それを「人間学」を問う試みへと展開しつつ，改めて「総合人間学」とは何かを考える新たな機会へと繋げて行かなければならないのである。

おわりに

ソクラテスの名前まで持ち出して，拙稿のタイトルの由来を説明した割には，「竜頭蛇尾」型の小論になった感を否めない。やはり，批判者を眼前に頂くことができない誌面上の応答には限界を感じざるを得ない。しかしそれでも，時間的，空間的制約のともなう学会活動の中で，学会メディアを媒介とした会員間の応答は，総合人間学探求の大きな力に成り得ると信じている。拙稿に失望された読者にも，これに懲りることなく，他のパネリストの論考を是非お読みいただき，拙稿の漏らした重要な論点の理解を補って頂ければ幸いである。

とは申せ，今回の「特集」で「〈総合〉とは何か」を問う試みが完成されるわけではない。否，むしろ，今回の試みが，〈総合〉の名のもとに眠っていた，さらに多くの謎と課題を発掘してしまったのではないかと思う。それ故，筆者としては，今回の試みの続きを様々な形で展開して行く必要を強く訴えたいと思う。幸い，その声が研究・談話委員会に届いたようで，2017 年 2 月 25 日（土）に予定されている本年度の研究会にて，「学会創立 10 周年記念フォーラム」の延長戦を行うことが決まった。望外の

喜びである。ただし，それは単なる延長戦ではなく，それ故，同じパネリスト集団が担うものではない。

そこで問いたいのは，「総合」を問うことだけでは見えてこない「総合人間学」の問題，すなわち，「人間学」を問うことなしには見えてこない「総合人間学」の課題である(7)。それ故，次回の壇上には，是非とも，良き批判者たちに立っていただきたいのだ。そして，筆者らパネリスト集団は，今度はフロアから堂々と意見し，自らの「弁明（アポロギア）」の続きを探究したいと考えている。

注

(1)報告でも示した通り，初代会長であった小林直樹氏が 2008 年 6 月に作成・配布された，シンポジウムや談話会で取り上げるべきテーマをまとめられた資料（通称「小林メモ」）によれば，シンポジウムで「〈総合〉とは何か」を問う必要が指摘されている。

(2)「弁明（apologia）」に込められたこのような意味を筆者は本学会理事の野家啓一氏の著作（野家 2016：181-183）から学んだ。

(3)時間の関係上，この点に関しては，フォーラムで言及されることはほとんどなかった。詳しくは，上柿（2014）を参照のこと。

(4)筆者は，〈自己家畜化〉研究会の世話役を務めている。

(5)この一文に関しては，長谷場氏から「シンポジウムの前後で持論は変わっていない」との反論があった。そう指摘されてみれば，確かに，筆者の見方には，偏ったところ（議論の明確な方向性の押しつけ）があるように思う。しかし，それでも尚，その反論に素直に応じる気になれないのは，本フォーラムに向けた数か月間にわたる議論の中で，長谷場氏の論調にも変化があったと筆者が理解しているからである。そして，この点だけは，長谷場氏もお認めになっている。それでも両者の溝が埋まらないのは，その変化が議論全体に与えた影響の大きさに対する評価が異なっている為だと考えられる。

(6)『パイドロス』の邦訳（日本語版）には，「美について」というサブタイトルが付してあるが，「総合（綜合）」と「分析（分割）」に関わる議論は，もう一つのテーマであるとされる「弁論術」批判の文脈で登場する哲学手法としての「ディアレクティケー（dialektike）」の説明に使用されている。

(7)この必要を筆者に痛感させた主要な契機の一つは，本小論「第 5 節」で取り上げた議論に拠る。

参考文献

穴見愼一（2016）「総合人間学会創立 10 周年記念フォーラム（資料）」（※ハンドアウト）

上柿崇英（2014）「「自己家畜化論」から「総合人間学的本性論・文明論」へ」『総合人間学 8（電子ジャーナル版）』総合人間学会，pp.142-146

小林直樹（2006）「総合人間学に向けて」『総合人間学の試み―新しい人間学に向けて』小林直樹編，学文社，pp.1-4

野家啓一（2016）『歴史を哲学する―七日間の集中講義』岩波書店

プラトン（1967）『パイドロス』藤沢令夫訳，岩波文庫

［あなみ　しんいち／立教大学（非常勤）／環境思想］